

雑感

1969年（昭和44年）に入所したときには、平城宮跡の発掘は内裏正殿の南に広がるプレハブ建物群を調査事務所としていました。蚕棚のような木製の二段ベッドでの宿直もあり、鉄製の釜である五右衛門風呂に入った。翌年には今の資料館建物が新築され調査部はそこへ移転しました。このような平城宮調査の草創期の名残を知るのには、われわれの年代が最後ということになるのだろう。



西村 康さん

このころ、月に一回所員会議があり、春日野の本庁舎へ出かけていました。発掘調査関連の本以外はこの春日野にあり、皆はこの機会に図書をみることも心がけていたようです。自分にとっては、市内へ出かけるのは、まだ奈良を知らない状態であったので珍しく、楽しみでもありました。会議の後で、先輩たちにつれられて博物館の前にあった食堂で昼食をとるのが恒例で、奈良らしい田舎料理を味わえました。

そんな状態の新人生活の中で、印象に残るのは、先輩や事務職員の皆さんが、われわれを一人前の研究者として、分け隔て無く接してくれたことです。むろん、われわれの方は、先輩と後輩という違いは常に意識していましたが、このような自由な雰囲気は小さな驚きでありました。学生時代に外から見ていた印象とはずいぶんと違ったところです。

そんな状態の新人生活の中で、印象に残るのは、先輩や事務職員の皆さんが、われわれを一人前の研究者として、分け隔て無く接してくれたことです。むろん、われわれの方は、先輩と後輩という違いは常に意識していましたが、このような自由な雰囲気は小さな驚きでありました。学生時代に外から見ていた印象とはずいぶんと違ったところです。

このように、先輩でも若輩でも研究者としては同じであるという意識が、研究所全体にあります、ということが奈文研の活力を生み出す源となっているのではないかと思います。

これからも、この伝統が継承されていくことを願うものであり、これがある限り、奈文研は発展を続けると信じています。

（埋蔵文化財センター 西村 康）

研究会の開催

日本遺跡学会設立

2003年2月1日、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、日本遺跡学会設立総会が開催され

ました。

埋蔵文化財センターが2000年度～2002年度まで3か年かけて学会設立に向けた“研究集会”を積み重ね、なんとか学会の形に漕ぎつけました。設立総会には130名余の人が集まり、2003年2月22日現在230名ほどの方が会員になっていただいています。裏方を引き受ける事務局としては大変ですが、さまざまな分野からより多くの人に参加していただき、有意義で、かつ楽しい学会を創りあげていきたいと考えています。

「日本遺跡学会」とはなんぞや、何をする学会であるのか、については“設立趣意書”と“当面の活動テーマ”をご覧いただきたいのですが、要するに現代のわれわれが遺跡とよりよく共存、共生してゆくにはどうしたらいいのかを考える学会だと思えます。事務局は当面の間、文化遺産研究部遺跡研究室に置きますので、入会希望などは同研究室までご連絡ください。（文化遺産研究部 高瀬要一）

古代官衙・集落研究会

2003年3月13・14日の両日、古代官衙・集落研究集会を開催しました。この研究集会は、在地社会における律令国家支配の実態について、学際的に考え、調査研究成果や問題点を共有する場として1996年から継続してきているものです。今年度からは、この会を古代官衙・集落研究会と呼ぶことにしました。

今回は、昨年度の墨書土器をめぐる研究集会を受けて、「古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐる—」をテーマとしました。その趣旨は、古代の陶硯や転用硯、墨を取り上げ、陶硯の変遷、器種構成、分布状況、陶硯出土遺跡と遺跡の性格との関係、陶硯の形態と使用主体の階層性、墨の生産技術・流通などをめぐる問題を整理検討し、官衙における文書作成や木簡記載のあり方についての研究成果と総合しながら、地方における文書行政や文字を介した末端支配の実態などについて考えることです。

研究報告は、吉田恵二「陶硯研究の現状と課題」、西口壽生「畿内における陶硯の出現と普及」、神野恵・川越俊一「平城京出土の陶硯」、生田和宏「城柵官衙遺跡における陶硯の様相—多賀城跡出土例を中心として—」、小田和利「地方官衙と陶硯—大宰府跡